

# 令和6年度教育実践計画

## I 校内研修計画

### 研究主題

# 子どもが輝く学びの創造

～思考・表現する場を大切にしたい授業づくり～

## 1 主題について

急速な情報化や、環境問題やエネルギー問題、世界規模で発生する自然災害、国家間の紛争等、様々な課題が山積している現代社会。日本という国を超えて世界規模で引き起こされる社会的変化が人知を超えて進展するようになり、予測困難な時代を迎えていると言える。このような時代を生きていく子どもたちが、様々な変化を受け身で対応するのではなく、主体的に関わり、解決していく過程を通して、自らの可能性を見つけ、存分に力を発揮していくことで、自分の人生をよりよい方向に切り開いていくことができる力を身につけることこそが重要であると考えます。

本校では、令和6年11月に開催予定の四国社会科教育研究大会香川県大会に向けて、社会科の授業を中心に研究を進めている。本校の教育目標は、「豊かな人間性を培い、自ら進んで取り組む、心身ともに健やかな児童の育成」であり、「本気全開！柞田っ子」を合言葉に児童の育成をめざしている。令和3年度までの道徳教育を核とした研究では、日々の授業や活動の中に、道徳教育の視点を盛り込むことで、子どもの自己肯定感を高めることを目指してきた。また、昨年度はこの研究を基盤に、様々な教科で子どもが思考・表現する場を大切にしたい授業づくりに向けて研究を進めてきた。

そこで、本年度は、これらの研究を基盤に、子どもが主体となって創意・工夫を重ねた授業のあり方をめざしていく。これからの時代を生きていく子どもたちにとって必要となる自分の思いや考えを根拠をもって伝え、多様な考えに触れながら、互いのよさを認めあいながら課題解決していく力を育てていきたい。そのために、日常の学びから教師主導ではなく、子どもたちが自ら課題意識をもち、主体的に話し合い、自分の意志で判断しながら納得解を見出していくことが重要と考える。こうした授業を「子どもが輝く授業」と考え、目標として定めることで、子どもたちは、自らの力で課題を解決できたことに自信をもち、将来、何か困難なことに出合ったとしても、自分の人生をよりよい方向に切り開いていくことができると考えた。

## 2 副主題について

日々の授業の中で、一人ひとりの子どもが輝くためには、子どもたちが「なぜ？どうして？」と追究意欲を伴って課題解決に向かい、「分かった」「おもしろい」と感じる大切である。そのためには、子どもたちが、各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を働かせながら、知識を相互に関連付けて解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることが必要である。さらに、友だちと話し合い、多様な考えに触れ、お互いの考えを認め合うことで納得解を見出していこうとする主体的・協働的な追究意欲も不可欠である。なぜなら、その過程で子どもたちは、「自分の考えを根拠をもって伝えること」「他者の意見の良さを認めること」「協働的に話し合うことで、自分たちの力で課題解決できたこと」等の経験を積み上げることで、予測困難な時代を生きていく力を身に付けることができると考えたからである。

そこで、本校では、子どもたちが毎日の学習や生活において主体的に思考・判断したり表現したりしながら、課題解決する力を育成することが「子どもが輝く学習の創造」に繋がると考え、副主題に設定した。

### 3 研究の内容

今年度は、昨年度に引き続き、子どもたちが学級集団で協働的に思考し、自らの言葉で表現する場、また、自らの学びをふり返り、次の学びにつなげる場を大切に授業づくりについて研究を行う。昨年度の学習状況調査の分析により、本校の特色として、知識・技能の能力は高いものの、複数の資料から読み取った事実を関連づける力に課題があることが明らかになった。こうした課題の解決に向けて、自ら問題意識をもち仲間と関わり、多様な他者の考えを取り入れながら、明確な根拠をもとに思考していく経験を積み上げていく必要がある。そこで、以下に示す3つの視点で研究を進めていく。

#### 【視点1】 解決への追究意欲を高める学習問題（問い）の工夫

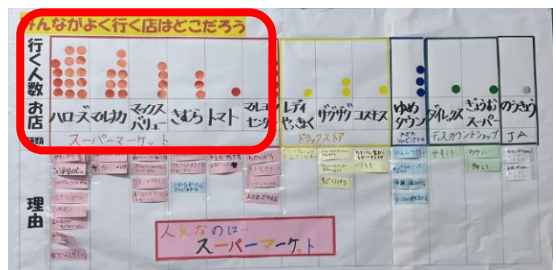
授業の入り口を支える導でのや問いづくりの工夫は、子どもの興味・関心を高めるために非常に大切である。問いの質を高めることが子どもの思考力や判断力等を培う前提条件であるとも言える。そこで、本校では「問い」の在り方こそが研究の出発点と考え、視点1を設定することとした。

#### (1) 追究意欲を高める教材の開発とその条件

子どもが主体的に課題を追究するためには、課題を自分ごととして捉えていくことが大切である。主体的に追究する意欲を高める教材を開発するために、本校では以下のように教材との出会わせ方や資料提示の仕方を工夫している。また、子どもたちの未来をよりよいものにしていくためには、よりよい社会をつくらうとしている人々を教材化し、工夫や努力を具体的に捉え、思いを寄せることが重要と考えている。

#### 【自分事として考えることができる教材】

3年社会科「店ではたらく人」では、単元の導入で各家庭での買い物調べをして、その事実をもとにグラフを作成した。そこから読み取れる「スーパーマーケットに行く人が多い」という事実から「色々なお店があるのに、なぜスーパーが多いの？」という疑問をもち、スーパーマーケットで働く人は、多くの人に買い物をしてもらうために、どのような工夫をしているのだろう。」という単元の学習問題を成立させた。



#### 【矛盾性をもつ教材】

りんご？簡単だよ。赤、レッドだよ！！  
本当かな～？



既存の  
知識との  
ずれ

青いバナナがあるの？？びっくりしたよ！！  
いろんな色を英語で言えるようになりたいな。



3年外国語活動「I like blue.」では、色や自分の好きなものを伝え合うことを目標としている。単元の導入で子供たちがよく知っている野菜や果物を使ってシルエットクイズをした。このクイズは「りんごと言えば、赤。バナナと言えば黄色。」という子供たちの既存の知識とのインフォメーションギャップを利用したクイズである。ギャップがあることで、子供たちの知的好奇心をくすぐり、「より多くの色の英語での言い方を覚えてクイズをしたい！」という意欲を喚起し、活動が活性化した。

## 【よりよい未来につなぐ教材】

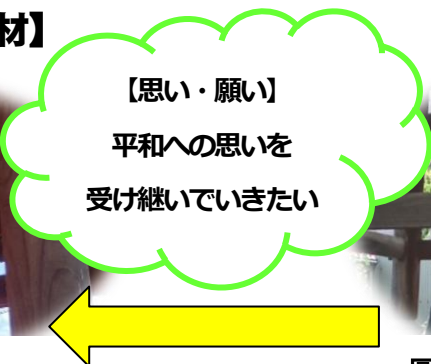


4年社会科「自然災害から暮らしを守る」では、柞田町で農家を営む片山さんの働きを取り上げた。片山さんは、風水害に備えて、川の氾濫や内水氾濫の可能性を低くするために、行政の呼びかけに応じて「田んぼダム」を設置した。さらに、地域へ呼びかけ、この取組みを広げようと努力している。この片山さんの働きを教材化し、「社会を支える人」の思いや願いを知ることを通して、子どもたちは、よりよい未来をイメージすることができる。また、協力して地域や社会の問題を解決しようとしている人々の営みを学ぶこともでき、こうした学びを繰り返すことで、よりよい未来に向かって自分の人生を切り開いていこうとする意識を涵養することができると思う。

## 【先人の思いを伝える教材】



圓明寺の石鐘



圓明寺の住職 北島さん

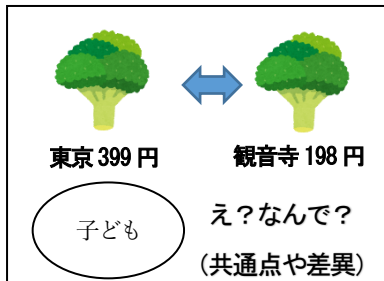
6年社会科「長く続いた戦争と人々の暮らし」では、愛知県名古屋市の圓明寺住職北島響さんを取り上げた。圓明寺では、第二次世界大戦中、金属回収令により鉄の鐘が回収され石の鐘となった。終戦後、北島さんの先代は戦争のおそろしさ、悲惨さを後世に伝え続けようと戦時中の石の鐘を残し続けてきた。先代から続くその思いを受け継ぎ、今日まで石鐘を守り続けているのが北島さんである。この北島さんを教材化し、「社会を支える人」の働きや、思いや願いを知ることを通して、戦争がもたらした「悲劇」や「犠牲」などを乗り越えて、よりよい社会に向かって工夫や努力をしてきた人の営みに思いを馳せることができる。そして、自らの「平和」への意識が変容し、よりよい未来をイメージできることで、自分たちにできることをよりよく選択・判断できるようになると考える。

## (2)心を揺さぶる教材との出会いによる学習問題の設定

子どもの追究意欲を高めるためには、どのように教材と出合わせるのか、という点も工夫していくことが大切である。そのために、以下に示すような出会いを仕掛けることで、子どもに「なぜ?」「どのように?」という心情を抱かせ、主体的に課題解決に向かう意欲をもたせることができる考えた。

### 【 問いの工夫 】

#### パターン1 「あれ?」



東京 399円      観音寺 198円

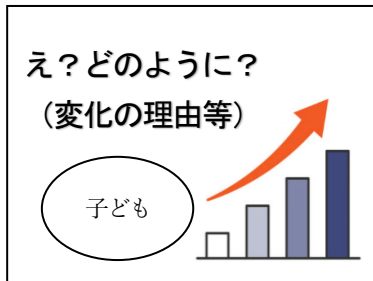
子ども      え?なんで?  
(共通点や差異)

子どもの既有的のイメージと異なる事象を提示することで、疑問をもたせることができる。

例えば、観音寺のブロッコリーの値段を知っている子どもたちに東京の値段を提示すると、その差異に「え?なんで?」と驚き、追究意欲をもたせることができる。

#### パターン2 「どのように?」

え?どのように?  
(変化の理由等)



子ども

グラフから数値を読み取ることで、その変化に気づかせる。その際、既有的のイメージや予想とかけ離れていればいるほど、子どもたちは、「え?」「どうして?」と疑問をもつことができる。

#### パターン3 「?を見つけて」

何だろう?なぜだろう?  
(物事の理由等)



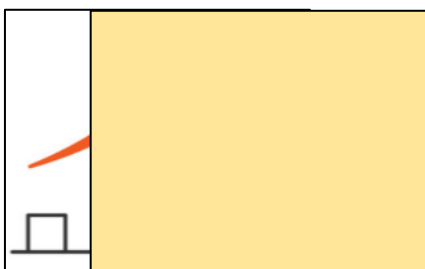
子ども

図や絵、写真等を提示し、そこから読み取れる事実から疑問を抱かせる。例えば、弥生時代のむらの様子から「この堀は何だろう?」「なぜ、高いやぐらがあるのだろうか?」と物事の理由に思いをめぐらせることができる。

### 【 誰もが疑問を持ち得る工夫 】

また、誰もが疑問を持ち得る工夫を行うことも大切である。例えば、以下の例①のように変化を捉えやすい提示の仕方や、例②のように文章や資料を限定的に見せる方法が有効である。

#### ①【段階的に提示】



文章や資料を段階的に提示することで、変化を捉えやすくすることができる。例えば、グラフから数値を読み取る際、1つの項目ごとに段階的に提示することで、数値や内容を確実に把握でき、疑問を持たせ、その疑問を焦点化することで問いを生むことができる。

#### 例②【限定的に見せる】



資料の中で、特に着目させたい箇所をクローズアップする。例えば、情報量が多い資料から、気付かせたい事象がある場合、その箇所以外を隠して限定的に見せることで、気づきやすくすることができる。

## 【視点2】 学び合い、高め合う話し合いの設定

主体的に課題解決する力を育成するためには、普段の授業の中で課題解決に向けて自ら考え、表現したり、多様な考えに触れたりしながら問題解決する経験を積み上げていくことが必要である。他者と協働的に学ぶことで多様な価値に気づき、思考の幅を広げることができるのではないか。そこで、自らの考えを表現する力をつけることが肝要と考え、視点2を設定することとした。

### (1) 納得解に迫る民主的に考えを創り出す話し合い

実社会では、人の様々な立場や意見、考え方によって多様な価値観が入り乱れている。子どもたちも、授業の中で話し合いや討論を行い、意見が対立する経験をしている。その際、少数派の意見の中にも光る考えがあると考え、自分と異なる意見も取り入れたり、妥協点を探ったりすることが大切であり、その中で子どもは、自らが有する知識や経験を働かせて価値判断を行い、自分の考えをより一層高めていくのである。しかし、こうした様々な意見が行き交う場面において、発言力のある子どもの意見に流されたり、多数派の考えに立場を置いたりするなど、自分なりの考えがもてない子どもの姿が見られる。また、それぞれの立場で意見を述べていくが、異なる意見が交わることなく、少数派の意見に着目されないまま議論を終える場合もある。これでは、考えに変容が生まれず、自分の意見を伝え合うだけの話し合いとなり、教師がねらいとする話し合いの深まりが期待できない。

そこで、本校では民主主義の根本に立ち返り、多数決に頼らない話し合い活動をめざしていく。多様で自由な考えが出され、その考えが尊重されながら誰一人置き去りにしない結論、すなわち、「納得解」に至る話し合いである。そこでは、一人ひとりが自分の言葉で意見を表出していく。そして、発言力のある子どもの意見や全体の傾向に追従するのではなく、多様な意見を取り入れた上で自ら判断し最終的に集団としての合意形成を図っていく。時として、AかBかを議論しながらCという新しい価値が見出される場合もあるだろう。本校では、このような話し合いこそが「民主的に考えを創り出す話し合い」とであると捉えている。

教師は、子どもの発するさまざまな意見を集約し、議論の方向性を定めながら「納得解」に向かうためのファシリテーター役を努めなければならない。子どもの意見を聞き取り、その価値を捉え、板書に位置付けながら、どう話し合いを進めていけば誰一人置き去りにしないものになるのか、判断力が求められる。

### (2) 自分の考えを語る力の育成—対話ドリルを通して、根拠をもって自分の考えを述べる—

子どもたちが主体的に話し合うためには、まず、自分の考えをしっかりとち、自信をもって伝えたり、友だちの意見を聞いて、考えを広めたりすることが重要である。そこで、平成28年度全国小学校社会科研究協議会研究大会に於いて観音寺小学校が実践提案された「社会科サプリ」を参考に、読み取った事実をもとに考え表現する「対話ドリル」を作成した。朝のドリルタイムに「対話ドリル」の時間を設け、根拠をもって自分の意見を伝える力をつけることを狙いとしたものである。

STEP1では、一つの資料から多くの事実を読み取り、全員発表することで、同じ資料からでも多様な読み取りができることに気付かせる。2週目のSTEP2では、教師の提示した簡易的な問いについて、読み取った事実を根拠に自分の考えを理由とともに伝える。この意見交流の中で、自分の考えとは異なる意見を聞くことで、異なる立場や考え方を知ることができる。そうすることで、多様な視点を身に付けたり、多角的に考える機会を得たりすることで、自分自身の考えを広めたり深めたりすることができる。と考える。

#### 【STEP1】 読み取る力をつけよう！！

- ① 資料・写真等から分かること・見つけたこと（事実）をワークシートに記入する。
- ② 分かること・見つけたことを交流する。
- ③ 今日のキラリ☆と輝く意見を決める。


#### 【STEP2】 考え、表現する力をつけよう！

- ① 問いに対する自分の考えを書き、理由も明確にする。
- ② お互いの考えを交流する。
- ③ まとめ・ふり返り

### 【対話ドリル STEP1】

対話ドリル 5年 No.1<読み取る力をつけよう！>  
月 日 名前( )

【STEP1】 下の写真を見て、見つけたことを書きましょう。



| 見つけたこと | 場所 | 見つけたこと | 場所 |
|--------|----|--------|----|
| ①      |    | ①      |    |
| ②      |    | ②      |    |
| ③      |    | ③      |    |
| ④      |    | ④      |    |
| ⑤      |    | ⑤      |    |
| ⑥      |    | ⑥      |    |
| ⑦      |    | ⑦      |    |
| ⑧      |    | ⑧      |    |
| ⑨      |    | ⑨      |    |
| ⑩      |    | ⑩      |    |


今日の学習( )



### 【対話ドリル STEP2】

対話ドリル 5年 No.1<考え、表現する力をつけよう！>  
月 日 名前( )

【STEP2】 【STEP1】で見つけたことをもとに、この町は、どのような町と言えるか、考えましょう。



この町は… ( ) な町

【理由】

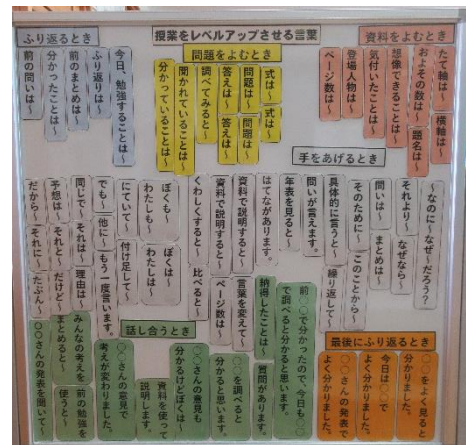
## (3) 深い学びへと繋ぐ協働的な話し合い—話型・ヒントカードの活用で見方・考え方を身に付ける—

他者と協働して課題解決に取り組むためには、話し合いの際に、しっかりと相手意識をもって話したり聞いたりすることが必要である。本校では、以前から「聞き方」・「話し方」の姿勢について指導をしてきたが、それに加えて、話型を活用して表現する力をつけていく。

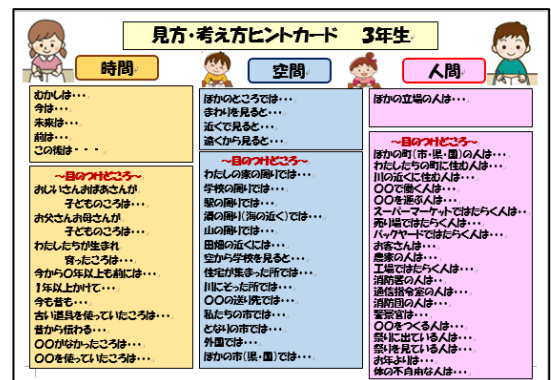
「話型カード」を活用すると、子どもたちの言語表現を豊かにするだけでなく、話型を選択する際に思考の方向性を示すことができる。例えば、「それに～」は添加を示しており、「もし～」は仮定して考えることを示している。このように話型を掲示しておき、子どもたちに選択させることで、教師は話型から自分の考え方を提示することもできるのである。そこで、「ふり返り」「話し合い」の2つの場面に分けて話型を作成した。「ふり返り」の場面では、前時のふり返りから本時の問いへ向かう子どもの思考を、「話し合い」の場面では、「付け足して」・「比べると」・「みんなの考えをまとめると」等と、話し合いの際に必要なとされる考え方を言語化した。

また、「見方・考え方」は、新しい知識・技能を既有的知識・技能と結び付けながら、思考力・判断力・表現力を豊かなものとしたり、社会や世界にどのように関わるかの視点や姿勢を形成したりするために重要なものである。「見方・考え方」を身に付けるには、普段から子どもが自分なりに考える過程、表現する過程を大切に授業づくりを行うことが大切である。そこで、各学年ごとに「見方・考え方ヒントカード」を作成した。「時間・空間・立場」の3つの視点を基に、各学年の学習内容に即した例を示すことで、子どもたちが自らの力で思考したり、多様な考えをもったりすることができる。このように、話型やヒントカードを日々の授業で活用していくことで、「見方・考え方」を働かせながら思考し、自分の思いや考えをしっかりと表現できるようになる。そうすることで、自分や相手の考えの根拠や理由を自然と意識し、深い学びに繋ぐことができると考える。

### 【話型カード】



### 【ヒントカード】



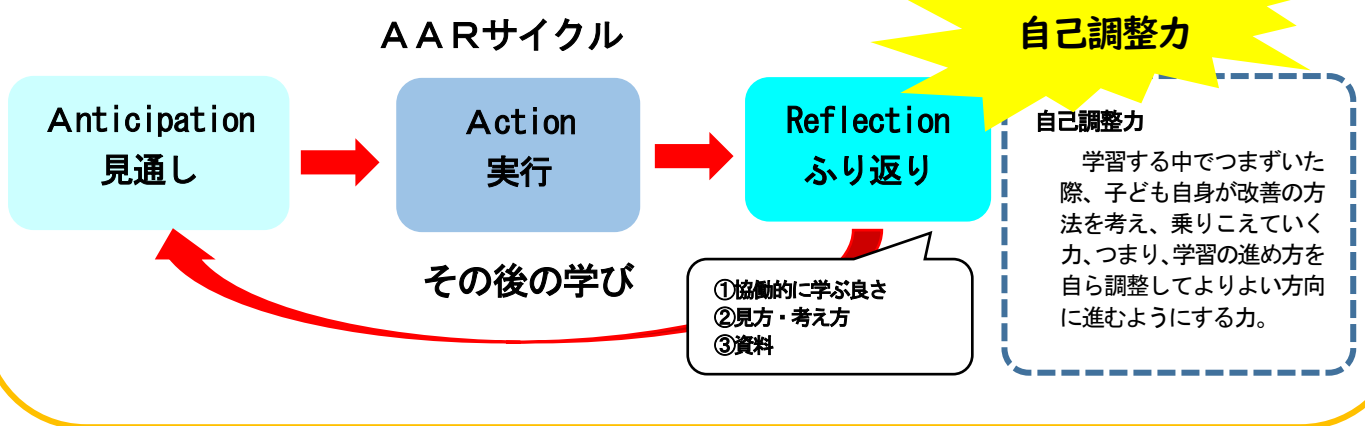
### 【視点3】 振り返りの工夫

自己の学びを深めるためには、振り返りの段階で、その時間に理解できたことだけでなく、自分自身の学び方を客観的に見つめ直すことが重要である。振り返りで客観的に自己評価を繰り返すことで、どのように問題解決ができたかを認識し、次の学びを深めることができると考えた。また、視点2に示したような民主的な話し合いに向けての学び方も強化することができると考え、視点3を設定することとした。

#### (1) AARサイクルで図る学びの充実 —振り返りから次の学びへ—

「AAR」—Anticipation：見通し、Action：実行、Reflection：振り返り

「AAR」とは、自分自身の学び方を振り返り、次の学習（単元内の次時、単元から次の単元へ）でも活用できるようにするサイクルのことである。



振り返りでは、子どもは、「何を学んだか（分かったか）」ということに目を向けがちである。これに加えて、「自分はどのように学び、どのように変容したか」という学習方法にも目を向けることで、「調べ方」や「考え方」が深まり、次の時間や単元で活用できるようになってくる。授業の中で、「見通し」「実行」「振り返り」は日常的に行われている。それをより顕在化し、児童の学ぶ力を強化するために、本校では、「振り返り」を研究の対象とした。それは、振り返りで協働的に学ぶこと、見方・考え方を働かせて考えること、資料を活用して考えることなどそれぞれ学び方のよさを感じ得ることで、次時以降の見通しと実行の質が変わると考えたからだ。

例えば、授業で新しく気付いたことや納得できたことについて、「どうして、気付けたのか」「なぜ、納得できたのか」という観点で振り返る。すると、多くの場合、「友だちの発表を聞いて」「過去の出来事と比較して」「資料を見直して」などと、協働的な学び、見方・考え方、資料のよさを振り返ることとなる。「今日は、時間を広げて考えると、よくわかったな」というように、見方・考え方を働かせるとよく分かったと思えた児童は、次も見方・考え方を働かせよう、と意欲をもって学習に参加する。また、友だちの意見を聞くと、よく分かったと感じた児童は、次も聞こうとする意欲をもって、授業に参加する。

このように、普段の学びの中にあるAARサイクルに着目し、振り返りを強化することは、児童らが「見通し」をもって「行動」できるという、課題解決に向けた学習方法を身に付けることに繋がり、子どもたちが教師の指示によって受け身で学習するのではなく、自律した学習者へと育てていくことが期待できる。

